

2024年4月7日（日）「人の持てるものは…」

ヨブ 1:6-12

6 ある日、神の子らが来て、主の前に立った。サタンもその中に来た。7 主はサタンに言われた。「あなたはどこから来たのか。」サタンは主に答えた。「地を巡り、歩き回っていました。」8 主はサタンに言われた。「あなたは私の僕ヨブに心を留めたか。地上には彼ほど完全で、正しく、神を畏れ、悪を遠ざけている者はいない。」9 サタンは主に答えた。「ヨブが理由なしに神を畏れるのでしょうか。10 あなたは彼のために、その家のために、また彼のすべての所有物のために周りに垣根を巡らしているではありませんか。あなたが彼の手の業を祝福するので、彼の家畜は地に溢れています。11 しかし、あなたの手を伸ばして、彼のすべての所有物を打ってごらんさい。彼は必ずや面と向かって、あなたを呪うに違いありません。」12 主はサタンに言われた。「見よ、彼のすべての所有物はあなたの手の中にある。ただし、彼には手を出すな。」サタンは主の前から出て行った。

【序論】

ヨブ記は読者に「世の不条理」について考えさせる不朽の名作です。悪いことをした人が相応の罰を受けることは当然であると多く人は考えますが、その一方で、正しく生きてきた人が言われのない苦しみに遭うことがあります。それも、人前だけの見せかけの正しさではなく、見えない神に対しても誠実に歩んでいたヨブが、ある日、青天の霹靂のごとくすべての持ち物が奪われ、健康面でも大きな試みに遭い、更には友だと思っていた人々から散々な仕打ちを受ける。誰がどう見ても納得のいかないストーリーが展開されていくのです。読者には最初に一つの答えが呈示されていることが大きな特徴です。それは、ヨブが試みられたのは彼の罪の故ではないということ。それを前提として、ひどい出来事が次々とヨブに襲いかかっていく様子を見続けるという、一面フラストレーションを抱かざるを得ぬ文学手法が採られています。

私は自分の健康面の問題に直面し、一か月間一步も外に出られないで痛みと痒みに苦しみ続けるなか、ヨブ記を学んでみるのが唯一ほんの少しだけ前向きに取り組めることでした。10年前に同じ経験をしたときに、生きている間にヨブ記から丁寧に講解説教をしたいという思いが与えられたのを覚えています。とはいえ、私が自覚するところでは、自分はヨブのように潔白を証明できるような人間ではなく、彼が経験した不条理のほんの一部も味わってはいないかもしれません。家族や持ち物が取り去られているわけではなく、皮膚のトラブルで苦しんだという点だけ、彼に共感できるものです。それでも、このような経験をした者にしか語れないこともあるのではないかと、本書の学習をライフワークの一つとすることにしました。この取り組みが、どなたか一人でも苦しみの中にある人に慰めをもたらすものとなることを願っています。

【本論】

本論 1. 天の会議

ある日、神の子らが来て、主の前に立った。サタンもその中に来た。主はサタンに言われた。「あなたはどこから来たのか。」サタンは主に答えた。「地を巡り、歩き回っていました。」

(1:6-7)

ここでは天の議会が開かれていて、「神の子ら」すなわち御使いの集団が集まっているようです。「サタン」と呼ばれる者がこの中にいることに疑問を抱かれるかもしれませんが、この時代には明確に「悪魔」を指すことばではなかったようで、むしろ御使いの一人として人間の行動を監視し、神にその悪事を訴える役割を担っていた存在のようです。原語の原型は「𐤒𐤔𐤕/サーターン」であり、「𐤒𐤔𐤕/ハサーターン」と定冠詞が付いていることから、「ザ・告訴人」といったニュアンスで捉えるとよいでしょう。新約ではサタンが明確な「神の敵」として登場してきますが、この時点ではまだ「墮落した御使い」という意味で出てきているのではないようです。人間の罪を訴えるために世界中を歩き巡り、神の義に基づく裁きを求める者と理解しておくといよいでしょう。

主はサタンに言われた。「あなたは私の僕ヨブに心を留めたか。地上には彼ほど完全で、正しく、神を畏れ、悪を遠ざけている者はいない。」(1:8)

ここで注目すべきは、ヨブについて話題を振っているのが神の側であるということです。余計なことを言わなければいいのに、とも思います。神はヨブについて最高の賛辞を送っており、サタンの目的が人間の告発であることをよく知った上で、彼を訴える余地などないだろうと胸を張ります。言わば、サタンに先に挑戦しているのは神の方なのです。

第一回目の説教でも用語の説明をさせていただきましたが、「完全」とは「心に分裂がなく、ひたすら神を愛し、神に従いたいと願い、神の恵みを喜び、罪を犯すことがあっても神が赦しの手段を備えておられることを知ってそれにゆだねる人」のことで、倫理的にパーフェクトな人を指すものではありません。とはいえ、彼が如何に「心においても」誠実に生きていたかを示す特徴的な内容が 31 章に出てきます。

- ・ 私は自分の目と契約を結んだ。どうしておとめに目を注ぐことがあろうか。(31:1)
- ・ もし、私が空しいものと共に歩み私の足が欺きへと急いだとするなら、神に、義の秤で私を量り、私の潔白を知ってもらいたい。(31:5-6)
- ・ もし、私の歩みが道からそれ、私の心が目の向くままに進み、私の手に汚れが付いているならば、私が蒔いたものを他人が食べ、私の子孫が絶やされてもかまわない。(31:7-8)

多くの方は、誰かに見られているところではきちんとしていても、見えないところでは気を抜いているものです。しかし、ヨブの場合はそうではなかった。常に神の目を意識して生き、見えないところでも責められることがないように、心の思いにまで気を配っていたのです。その生活態度を神ご自身が認め、ヨブとの間に契約関係を結んでいました。「私の僕」とは、両者の間に特別な関係性があり、破格の扱いを受けていたことを示すことばです。

本論 2. サタンの訴え

それに対し、サタンも黙ってはいません。

サタンは主に答えた。「ヨブが理由なしに神を畏れるでしょうか。あなたは彼のために、その家のために、また彼のすべての所有物のために周りに垣根を巡らしているではありませんか。あなたが彼の手の業を祝福するので、彼の家畜は地に溢れています。しかし、あなたの手を伸ばして、彼のすべての所有物を打ってごらんなさい。彼は必ずや面と向かって、あなたを呪うに違いありません。」(1:9-11)

サタンの主張とはこうです。ヨブが敬虔に生きているのは、神から特別扱いをされているからである。「周りに垣根を巡らしている」とは、ヨブのおびただしい財産を神がガッチリと保護しておられるということ。サタン自身もその垣根を越えて入り込む余地すらなかったと言いたいのでしょう。「地に溢れています」(רָבַץ/パーラツ)は、原語では「突破する」「破裂する」などを意味する語で、ヨブの財産が徐々に増えたのではなく、神の特別な介入によって短時間で爆発的に増加したことを表します。誰の目にも「信じられない」祝福が見てとれたのです。

人はそれぞれ所有物や財産だけでなく賜物にも違いがありますが、多く与えられている人を見て羨んだ経験があるのではないのでしょうか。明日食べるものにも困窮している人から見て、有り余る富に囲まれている人は羨望の対象となるかもしれません。能力や賜物においても、私たちがどんなに求めても到達できないほどのものを持っている人がいます。どの分野を見ても、上には上がいるのです。

ヨブの生活を見て羨む人は少なくなかったはずですが。施しを求めて訪ねてくる人も多かったのではないのでしょうか。そのような人々に対して、ヨブは惜しみなく手を開いたとも語っています。

- ・ 私のことを聞いた耳は私を幸いな者とたたえ、私を見た目はこれを証した。私が、苦しみ叫び求める人を、寄る辺ないみなしごを救ったからだ。死にゆく者さえ私を祝福し、やもめの心を私は喜びで満たした。(29:11-13)
- ・ 災いの中で叫び求める者がいても、人は瓦礫の山に手を差し伸べない。だが、私は苦難の日を送る人のために泣かなかっただろうか。私の魂は貧しい人のために悲しまなかつただろうか。(30:24-25)

このような人は、寛大に施せば施すほど更に富が増し加わる傾向があります。与えれば与えた以上にまた入ってくる。ヨブの人生とはまさにそういうものだったのです。彼に助けられた人々は、誰もが自分もヨブのようになりたいたいと思ったはずですが。祝福の良循環、栄える人のマインド、ヨブにはそれらが完璧なほど具わっていました。

しかし、サタンは意地悪く提案します。「ヨブの所有物の一切を取り去ってごらんなさい。そうすれば彼が、多く与えられていたから神に対して敬虔であったことが分かるでしょう。結局のところ、ヨブの敬虔は御利益宗教に基づくものなんですよ。」

本論3. サタンの挑戦を受ける神

読者としては、ここで神に踏みとどまってもらいたい。ヨブの本質を知っておられるなら、サタンの挑発に乗る必要などないではありませんか。敢えてヨブを苦しみと悲しみのどん底に落とす必要などないのではないか。しかし、神はヨブの心の真実を表すため、サタンの手に引き渡されます。

主はサタンに言われた。「見よ、彼のすべての所有物はあなたの手の中にある。ただし、彼には手を出すな。」サタンは主の前から出て行った。(1:12)

神は一つの条件を付けて、サタンに行動を起こすことを許されました。ヨブ自身には危害を加えることなく、彼に付随するものだけを撃つてよろしいと。まずこのところに、サタンの行動の支配者は神であることが強調されています。神の許しなしには、サタンも何もすることはできないのです。神はサタンの首に紐を付けた上で、出て行かせました。

さて、ここで私たちは一つの真理に直面し、考えることが求められています。私たちが神を信じ愛する者であるならば、神は私たちをどのように見ておられ、どのように扱われるのかということです。今日の記事から分かることの第一は、信仰を持って生きるときに大きな祝福を受ける可能性があるということです。私たちが常識的に得られる報酬以上の勤労の実が与えられるかもしれません。私たちの心も解放され、神との全き関係の中で、何もかもが上昇気流に乗っているかのように滑り出す時期が、私たちの人生の中に訪れる可能性があります。しかしながら、その祝福された状態だけが神との契約関係の証なのではないということも、今日のテキストは教えてくれています。私たちの人生に与えられた宝の一つひとつが、何らかの事情によって取り去られることもあるのです。財産、家族、友人、能力といった、自分にとって大切なものが、神の許しの中で失われることがある。そのとき、多く与えられている人ほど、喪失感は大きくなるでしょう。たくさん財産が与えられていた人が、戦争や災害によって無一文になってしまうこともあります。能力や賜物に富んでいた人が、何らかの事故によって何もできなくなってしまうかもしれません。それほど極端な経験はしなくとも、私たちは誰もが年老いていき、若い頃にできたことができなくなっていく。体力、気力、美貌、健康……、それらのものは早かれ遅かれ衰えていくのです。

ヨブが失うものについては、2章を扱うときに具体的に見ていくことになります。その悲惨な状況、まさしく彼の人生に突如として降りかかってきた「災い」は、筆舌に尽くし難いものがあります。同時に、彼がその状況に対してどのような反応を示していくかも注目すべきポイントとなります。

今日の時点で私たちが取り組むべき課題は、いま自分に与えられている一つひとつのものがどこから来ているかという認識であります。それは自分の力で得たものなのか、それとも誰かから与えられたものなのか。自分の心は、それらに対してどれほど執着しているだろうか。もしもそれらを手放さなくてはならなかったとき、私のアイデンティティは確かなものとして残るであろうか。そこに神との関係はあるだろうか。

【結論】

これらのことは、そう簡単に言葉にできるものではありません。無理をして立派な回答をする必要もないと思います。しかし、自分に与えられているもの、可視的なものも不可視的なものも、その主権が誰にあるのかということ問い直すことはできるのではないのでしょうか。私たちの命さえ、自分で得たものではありません。私たちの人生のすべての日々を「神のもの」としてお返しして生きる時、人はまことの自由を得ることができるのです。ヨブはその意味において、如何に自由な人であったかを知ることになるでしょう。この世のものに執着しない自由、それは私たちが持てるものの一つひとつを主にお返ししていくときに知ることができるのです。

【祈り】

万物の源であられる天の父なる神様。私たちは限りある人生の日々の中で多くのものを手にします。しかし、それらは最終的に与え主であるあなたにお返ししなくてはなりません。願わくは、今それを持っているときから「あなたのもの」として生きることができますように。それらを取り去られる日が来たとき、「主のもの」として潔く手放すことができるよう、この世に対する一切の執着から解放してください。神と共にあるまことの自由のうちを歩むことができますように。

【祝祷】

仰ぎ願わくは、
万物の源にして、一切のものを賜物として人に与え給う、父なる神の愛、
この世のものにも、自分のいのちにさえ執着しない生き方を示し給うた、主イエス・キリストの恵み、
自分の持てるものを「神のもの」としてお返しする自由を与え給う、聖霊の親しき交わりが、
あなたがた一同の上に、限りなくあらんことを。